

おふさ重井筒
徳兵衛

上之卷

夜さやいー夜來
いと三ふ意を歌
の節にしにり
鼠色一區にかけ
て紺屋に因みた
る染色を願す
やばてりがき云
云ー濃き磁色、
薄柳は淡色、
外が内ー茶屋酒
に耽りて内に居
ちぬ
山衆一も山
浅枝ー以下又例
の懸詞
下染ー素性
みる茶ー茶褐色
にて見るにかく
柳煤竹ー夫に逆
はゞ立脚く事に
かけて云ふ
赤み氷るー郡山
にかく

明夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寐た處、裾に清十郎と鼠色、京の吉岡紙子染、やほてりがきか、うすがきか。三「正月前の際々に、旦那殿は外が内。御神酒過してうかくと、山衆といへば目が見えず。内に居やんす内儀様、此方とばかりに打任せ、誂物も節季をも、如何仕舞はんす事じややら。下心の悪い旦那殿」喜「やい三太、そりや何んじや。茶屋へ往きやるが、山衆を買やるが、旦那は旦那、此方とは紺屋の手間取。何事もささりつと淺黄にいふて居よいやい」三「オ、喜兵衛の言やる事なれど、我身は元を知るまいが、地體旦那の下染はの、重ね井筒屋といふ南の茶屋の弟で、是へは入婿。乳呑子紋を持たながら、人のみる茶も構ふにこそ。お内儀は結構者、柳煤竹にやつてじやが、隠居の親父が來ると、家内はしみこほり山染になるはいの。彼の様にほついて

せうぶつ—贈物

水も飲れぬ—生
計が立たぬすつきりーとん
と

は、廳やぐらて身代しんだいは木賊せきさく色いろで、研たろす様さまになつて除のけふ」と笑わらひける。酒漬しゅづけに、水もつくかや我わが宿やどへ、歸かへり紺屋こんやの徳兵衛とくべゑ、忙いそがしけに立歸たてかへり、「これ庄助しやうすけ、喜兵衛きべゑ、埒らちが明あかぬの〜。これに未まだかよつてか。何いつじやと思おもふ。今日けふは師走しはすの十五日じふごにち、中なかの島しまのそうぶつ物ものも昨日きのふ限かぎりの約束やくそく。谷町たにまちの蒲團ふとんも未まだ持もつて往ゆくまいな。兄貴あにさまから誂あつちへの、重かさね井筒いづつの暖簾のうれんも遅おそいといふて腹立はらだちじや。女房共にようどもは何處どこへ往いた。エ、どんけな。一言いちごんおれが言いはねば最もうそれほど間まが明あく。吩咐いひつけも見廻みまはしも、口くちは一ツ目めは二ツ、これでは水も飲のれぬ」と、いふた處ところは見事みごとなり。下人共げにんどもは平常いづつの事こと、「お内儀うちぎ様さまは鎗屋町やりやちやうの姉様あねさまへ、烏渡ちよつと往いつて來きふ程ほどに、お前に問とふて蒲團ふとん地ぢも持もつて往いけとの事こと」といへば、徳とく「そんなら喜兵衛きべゑ持もつて往いきや。庄助しやうすけは提灯ちやうちん持もつて女房共にようどもを迎むかひに往いけ。それ坊主はうすめ奴めに怪我けがさすな。負たふて歸かへれ」と吩咐いひつければ、「あい〜」いふもそこ〜ながら、皆々みな表おもてに出でにける。亭主ていしゆも辻つじまで行ゆくかと思おもへしが、三十許はふりの女房にようばと、何なにやら囁ささき呟つぶきて、連立れんたつち内うちに入りければ、女にようばは亭主ていしゆと座ざを組くみて、おいろ様さま顔かほして居ゐたりける。年季ねんきの三太さんたすつきりと合あ合あせず。じろ〜視みるを徳兵衛とくべゑ、「これ三太さんた此處こゝへ來こい。突つと寄よれ」と膝元ひざもとに呼よ付け、「此奴こゝらはずんど俐口りこう者もので、言いふなといふ事こといはぬ奴やつ。それで人ひとが可愛かいがる。近ちか付つきになるしるしに何なにぞ遣やつてたも」といへば、彼かのの女にようば、「左様さやうや

顔見世十一月
に行ふ顔見せ芝
居

遣らるゝ一自分
の事を他人の様
に云ふ

豆板一小粒銀

やる粹云々一金
を遣る人より買
ふ三太が通人

らして目元が惻發に見えます。なんと顔見世見やつたか。札買やる錢遣ふか。但し何
んぞ餘の物が欲いかいの」といひければ、三「否へく私等芝居が見たけりや、六軒町の兄
御様から何程往ふと儘じや。私や銀が欲しい」といふ。女「ム、銀持て何買やる」三「アノ銀貫
ふてか。銀貫ふてから其銀で、餘所々のお妓が一ツ買ふて見度いと遣らるよじや」と身
を縮む。女「これは出来いた。容易い事く。して誰ぞ惚たのがあるか。サア言へく」と訊
ひかけられて恥しがり、「私が惚たのは、いろはの中にある」といふ。女「ヤアそんならいろ
は茶屋か」三「否へく太左衛門橋筋に」女「何んじや太左衛門橋にいろはとはちりぬるを
わか、よたれそつねな」と吟じ返せば、三「それく其次の、らむうけんだ」とぞ答へける。
「これは上物上目利」と、豆板一粒はつとはづみ、徳「ヤイ今此處へ銀持て來る人がある。
此女衆をお内儀様かと言はふ程に、必ず否やと言ふなへ。さて此事を、女共にも朋輩にも
微塵も言ふ事ならぬぞ。合點か」といひければ、三太郎首肯き、「勿體なやく、言ふ事では
御座りませぬ。若も重ねて言度い心が出来た時々、お前へ密と斷りませう程に、又銀を
下さりませ」と、阿呆な顔でも損をせぬ、遣る粹よりは粹ならん。時に表に、「頼みましよ。
紺屋の徳兵衛殿は此方か」と、年ばいなる仁體なり。徳「ヤア治右衛門様かお入りなされ」

ふかしい云々
こみりたる事
はいはねども
口入れ一世話人

丁銀一形長き銀
貸にて百目が金
一兩二分餘にあ
たる

口をとめたる云
三留の縁に徳
糊、糊の縁に徳
(解)と續けたり

治「御免」といひて通りける。徳「あれ女房共、内々の治右衛門様、和女の判なら銀貸さうと仰やる。お目にかよつて置や」といへば、喋合せてや彼の女、「これは先ア、御懇親な。尤も家も商賣も、私の物とは申しながら、子なか産した中なれば、最う今では屋財家財、皆主の物で御座ります。斯うお目にかよる上からは、妾が請合。ふかしい事こそ、此家屋敷相應に、三貫目や三十兩は貸てやつて下さいやせ」と、袂々合せる辯舌に、口入れ喰ふた顔相にて、治「ア、くこれには及ばぬ事ながら、徳兵衛殿は入家と聞く。斯う致せば後の爲、又も用を聞かふ爲。サア判をなされよ」と、手形を出せば徳兵衛、掛碇引寄せ、「これと女の判」さらば先づ私」と、互に印判明白なり。治「丁銀四百目包の通り、吟味なされ」と受取渡し、「最う暮まするお暇申そ」徳「些とお盃いたしましよ」治「重ねて、預けます。さらば」といひてぞ歸りける。徳「ざつと濟んだ目出度し」と、銀懐に押入れ、「これ三太、此女衆を送つて烏渡往て來る程に、門もしめて火も灯せ。其中お辰が戻つたら、湯屋へ往たと瞞して置け。必ず何んにも吐すな」と、口をとめたる紺屋糊、徳様早ふ」と、出にけり。所帯持ても色は猶、捨ぬぞ道理紺屋の妻、月も冴え行く夜嵐に、妻「あゝ提灯も好いはいの」宵寝まどひの小市郎、竹が脊中にふらくくと、「寢風ひかすな大事の子」萬年町に

法界の男一掃茶
の男

しこだめ云々一
どつさり貫はん
鋸商一兩方から
取る故云ふ

額に絶えし一額
に毛抜をあつる
は若者のする事
故いふ
燈心を云々一土
器より燈心を出
せば油が要るゆ
ゑ引くにかけた
り

悪性一放蕩

歸りしが、問ひもせぬに三太郎、「旦那様は只た今湯屋へ」といへば、妻「チ、く、どうで湯
か茶か香にである。法界の男じやと思へば濟む」と、恨みながら、小市郎が目覺すを、暖
簾の奥の小座敷に、漸々賺し寝入らせて、我も着物着換んと、押入明ればこりや何んじ
や、掛硯明廣げ、夫婦の印判取散らせり。これはくと言はんとせしが、四邊を見廻し
押沈め、「こりや三太郎、其方に大事の物遣らふ。火を灯して奥へ來い」と、いふより早く、
三「應い、く、く、さらばしこだめ參らふ」と、小行燈提けて入る有様、下女手間取は見送
りて、「内儀様と旦那の中、彼方へさよゑ、此方へ言ひ、兩方で物を擲居る。彼奴は鋸
商ひ」と、鋸屑の言甲斐なき、猜みも下のやくぞかし。此家の隠居吉文字屋の宗徳、代
代傳はる紺屋の形と、共に兀たる頭を剃し、額に絶えし古毛抜、喰兼ぬ世も算用づく。
此家屋敷家職をば、妹娘に鋸屋町、姉にかよりて隠居分、薪の始末燈心を、日暮て一
人によつと來る。内の者共、「あれお辰様、鋸屋町の隠居様のお出」といふ聲に、妻「應」とい
ふて立出る。宗徳突り聲にて、「入聲殿は何處へぞ。節季師走内を明て、出るとても出す
ものか。これ二人目の聲じやぞや。彼の孫の小市郎に、父親三人持たしやんな」と、いふ
顔の不興なれば、優しくも女房は、良人の悪性押包み、「何んの餘所へ往やりましよ。方

談義參一説教聞
きに行く
鼻算一疊の目を
歌へて吉凶を占
ふ
鹽の長次郎一
品師の名

方のそうぶつ物、内外の者の手は足らず。今朝早々から仕事して、風引いて頭痛するのと、奥に寢て居られます。お前は何しにお出」といへば、寧ろイヤコレ徒は來ぬ。只今和女が歸つた其跡へ、堀江の口入れ治右衛門といふものじや。此方の娘御婿殿兩判で、銀四百目貸しました。若い人の事なれば、後日の念に烏渡知らせて置ます。と言置て歸られた。聞くとおれは眼が眩暈で、一服の藥を呑さいて來た。四百目といふ銀を、何にするとして借たぞ。喰込だか、へこんだか。女夫の中の榮耀使ひか。エ、おとまじや。身代は得持まい。おれらが談義参りして、一文投る賽錢さへ、進ぜうか進ぜまいかと聲算置て見て、假へ算が合ふても五度に三度は投げずに仕舞ふ。側に居る同行衆がぐはらく投る時には、錢を一文摘んで、片手を斯う振上げ、投る顔で鹽の長次郎、錢は手にとまつた。斯う氣轉を利せねば過にくい身代。四百目は何にした。行端を聞かふ」ときめらるよ。女房さては丁稚奴が咄しに違ひなしと、思ひあたれば妬まじさ。寧ろ言ふて退ふか。いやくそれとも慘い事。如何か斯かと喘來る間に、先づ先立つは良人の可愛さ、「ア、親父様なんぞと思へば仰山な。妾ら女夫が何に借錢しませうぞ。其銀はな、南の兄御の方に、曲輪から出た好い奉公人を抱へて、手附銀が遣度いが、世間共に銀詰り、彼の邊りは利も高

千里萬里云々
餘程な手違

まくし出しや
追出せと也

もがり物干

實事―役者の寫
る事

し、殊に兄御は病中なり、妾等が判では貸す人あるとの頼み様。銀こそは成まいし、判捺く程は一門がひ。殊に妾と他人なれば、猶しも義理はかよれず。又用無心もあるものと、それで判を押しました。内外の者も聞ぞかし。千里萬里も違ふたか。餘りな親父様と、陳ずる心の優しさよ。徳兵衛は女房の歸らぬ先にと足早く、門口に立けるが、内には舅の喚き聲。「南無三寶」と入りもせず、暫く様子を伺ひける。舅猶も納得せず。「ヲ、女夫が言合せ、親を瞞して身代潰せ、寢て居るも嘘じや。何處へ失せた」と穿鑿す。妻ハテ何んの留守なら留守と言はいでは。あれ暖簾の彼方へ」と指させば、宗徳は暖簾打上げ、孫の事は氣も付す、老眼の何見てか、「ム、ウ先づ職人には似合ぬ彼の鬢付が氣に入らぬ。頭痛のする寢やうでない。又喰ひ酔ふたか。春は早々まくし出しや。彼の様な髻なら、二十人や三十人は今の間に取て見しよ。三日と一人寢させはせぬ」と呟きく雪駄穿く。内の者共、「最うお歸りなされますか。送りませう」といひければ、宗「ヤア道なら些と送つて、それ言立に夜食喰ふといふ事か」と、門の戸明れば徳兵衛、もがりの蔭に隠れしを、それとも知らで歸りしは、危かりける次第なり。入違ふて徳兵衛、突と通つて羽織を背後へひらりと投げ、實事の格は見覺えたり。女房の膝元に無手と居て、「こりや最前からの次

第、門口かどぐちに聞いて居ゐる。留守るすのおれを寢ねて居ゐると、親父おやぢの手前てまへは男おとこをかばふ様やうなれど、職しやく人に似に合あはぬ鬚ひんつき付つきな男おとこを、身かみが代かりに寢ねさせたは念ねんが入いつ。忝かたじけない。入聲いりせこの事ことなれば家屋いえや敷しき家財かさいにも嬰粟けしほご程ほども疵きずは付つまいが、うぬが命いのちに疵きず付つける。只今ただいま密夫まをこを引摺ひきずり出して見みせうぞ」と、奥おくに飛と込み、何かは知らず「わつ」と叫さけぶを胸倉むねくら掴つかみ、宙ちゆうに引提ひつけ躍をり出で、どうと引ひすへ能なく見みれば、這こは如何いかにに坊主ぼうず天窓あまの小市郎おな。盆ぼんに買かふたる踊おどの鬘かづら、奴やつ天窓あまを掉ふりながら、「母かみ様さま怖こほい」と泣居なみたり。徳兵衛とくべゑも仕舞まじ付つかず、詞ことばなければ女房にようばうは、宵よひより積つる憂うれ涙なみだ、一度いちどにわつと叫さけび伏ふし、消きえ入いるばかりに泣なけるが、「なふ徳兵衛とくべゑ殿どの。慘むごふ御座ござる辛つらいぞや。不義ふぎせう者ものと見みするたら、何故なぜ附張つきはつても居ゐもせい、元日ぐわんじつから元日ぐわんじつまで、能なふ往いき處ところもある事ことぞ。此方こなたの留守るすの言譯いひわけに、ふつづりと事は缺かく。隱居いんきよ様の聲こゑと聞き、側そばにあつたを幸さいはひに、此子このこに着きせて間まを渡わたしたも、妾めかけが智慧ちゑではあるまい。氏神うぢがみ様のなされたと有難ありがたふ思おもへども、恨うらみ受うれば是非ぜひもなし。女房にようばうの口くちから推參すゐさんながら、言ことはば此方こなたは人ひとでなし。房ふさと挨拶あいさつ切きれぬけな。餘所よそ外ほかでもある事ことか。兄御あにごの内うちの奉公人ほうこうにん、躰しつ異い見けんもすべき身みが、客衆きやくしゆとやらのかいになり、身代みしろの妨たがひと、嫂御あによめごのねすり言こと、聞辛きつらや聞憎きにくや。ア、それも道理ことわり。又跡またあとの月つきの騒動さわごうに、一家いけが寺てらへ退のいの時とき、見舞みまじに往いつて見届まじつた。餘よのお山衆やまのしゆは押退おしのけて、

間を渡し一問に
合す
推参し出西張る

かい一妨げ

ねすり言一あて
こそり

けばくしい
目立ちたる
まぶられて一注
目せられて

一念發起一善心
に立返るをいふ

伊勢の御縁日！
十六日
人置一屋人の口
一角一歩

房一人を大事にかけ、此處邊で心底見せ顔に、けばくしい仕方共、側に居るは知た衆、此方より妾が顔、阿呆らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや。それに餘り踏付た先刻に房を連て来て、女共の女房の、印判までを引探し、納戸戸棚も見せ曝し、これが嬉しからうか。男男の恥よりも、隠しても隠したい、女同士に恥を見せ、男は寝取られ、寢間帳臺は見探され、阿呆の數々讀盡され、これでも男の可愛ひは、さても如何なる因果ぞや。今日の事が隠居へ聞え、妾は親に叱られながら、科を負ふて居る心。人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日は碌々に、寢物語もあれかし」と、心一杯理をせめて、情も深く口説き泣く、千々の思ひぞ哀れなる。徳兵衛一念發起して、「ハツアあよ過つたく。悪人とも業人とも、盗人とも騙満とも、我ながら重罪人、今迄も和女に恥。止ふくと思ひしが、是程の瀬戸がなふて浮々と盡した。我一人思ひ切れば、和女、子供、隠居の爲、兄の身上、我身の爲、房めが後の爲も好い。其處を知らぬ身でもなし。明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され、三世の諸佛の御罰を受け、二人の親に冥途から、睨み殺さるゝ法もあれ。ふつつと思ひ切たぞ。今日の女も房ではない。人置きを娘を一角で頼んだ。證據には其銀此處にあり」と取り出し、「明日直に返辨し、向

研しやー研せよ
竹一袋けにかく

首尾なつて一都
合がてきて

後房とは通路せぬ。今迄心を無下にした、恨みも辛みも赦したも。さりとは此徳兵衛、女房の罰が當つた。罪を赦してくれよ」とて、手を合せてぞ泣き居たる。女房莞爾と打笑ひ、「エ、忝ないく。挨拶切た捨たのと、幾度か聞たれども、銀まで見せての誓文。とんと心も落着て、今日から眞の夫婦。皆悦んでたもや」とて、嬉し涙を流せしが、「迎の事に年寄て、一夜の心もやすめたし。太儀ながら隠居へ往て、今の誓文一通聞せまして下されかし。これは妾が御無心、御恩に受ふ」とありければ、繼「何がさて譲り受れば、我爲にも親同然。ツイ鳥渡往て來ふ」妻そんなら左様して下さんせ。生姜酒して待ませう。それ生姜研しや釜の下」竹は手樽を振て見る、酒の通ひ路引換て、夫は北へと出けるが、辻にてふつと思出し、「南無三寶、義理に詰つた女房の臺詞、尤もと胸に應へしより、房が大事をはつたりと忘れたり。入相限りに待て、待ふ。此手筈が違ふては、生死の出来る銀。いやく、親父は明日の事。鳥渡逢ふて」と立戻る。「ア、左様もなるまいか。只今誓文立、殊に銀も手放したり。先づ此方を仕舞ふて退ふか。ハア可哀や、房がどうぞ銀の首尾なつて、雞卵酒飲む様に仕度い事じやと歎きしを、氣遣ひすなと勇めしが、氣の弱い女なり、此方は儘よ」と又立歸り、「思へばく女共、生姜酒して待ますと、手づか

生考一爲ように
かく
河一貫身にかく

色の徳云々一徳
不孤必有隣に
酒はす

よすが一便
はちみく一孕句
即ち腹蓋の句、
含むにかく
火廻し一巻割菜
に紙捻に火を
點じ紙人廻して
戲とす云々

丙午一丙午生れ
の女は男を殺す
と云ふ俗説

ふたせ一二瀬
下女兼帯の妓

ら生姜研したる志も不便なり」と、辻を越えては又戻り、辻に立たり匍匐ふたり、行も歸
るも定まらず。如何せうか斯様生姜酒、熬つく様に氣がなつて、胸搔廻す雞卵酒、心二
ツに打破て、君が方へと走り行く、後は涙の玉子酒、霜の白みに 三重

中之巻

月は早、渡り初して中橋や、六軒町の小夜格子、唐土の聖人の曰はく、色の徳には隣あ
り、向ひ兩側輝す、軒の燈火目印に、昨日も今日も明日の夜も、重ね井筒の釣瓶繩、手
繰來いとよすがかや。中に不便や、房は憂身の種々を、心一つにはらみくの、脇が勇めば
力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢の下、人待つ宵の火燭や。小夜も小六も浮きく
と、引裂紙の捻り元結で火廻しを、妓「火斗」「日野絹」「房様なんと」「房妾は獨寢」妓「ア、
忌々し」妓「緋無垢」「冷酒」「引舟」「火桶」「雲雀」「鶉」「比叡の山の檜の枝に」「そりや鳥指
が」房「鳥でないぞや身は丙午」妓「又房様の忌々し。男殺そといふ事か。此方は祝ふて姫小
松「緋縮緬解く人目の隙に、鬼も來なと柊や、」雛子「ひしこ」ひともし「エ、洒落臭い」
ふたせ仲居も小差出で、炊婦は來て「火吹竹」、料理人まで「冷し物」駕籠の彦兵衛「膝頭」

ひらのや云々
程麩の名

火屋—火葬場

灰寄—骨拾ひ

四つ云々—四つ
の鐘(午後十時)
にかく
思ふたつば—思
ひし通り

いかよ—よほど

「柄杓」緋緞子」蠅」平の蒟蒻」菱紬」ひらのやるきやう」肥後すいき」妓」サア、紙燭が皆になる。なんと房様、サア如何じや。如何じや」と詰かけられ、房「ア、姦しい息が出ぬ。物がいはれぬ赦してたも」妓「息が出ずば火屋へやれ」そんなら火箸で焼て退け」「南無三寶火が消えた。サア房様の灰寄せじや」と、哄と笑ひし戯言も、明日の哀れとなりにけり。火廻し半ばへ飛脚屋が、「何も御用は御座りませぬか。ヤア房様、京へ上す銀もあり、御状もあるとの御事。遣はされませぬか」と問ひければ、房「ア、能ふ寄つて下んした。未だ文を書ませぬ。ま少時してから来て下され」飛「それなら明日の便になされませ。今宵は仕舞で御座る」といふ。房「尤もなれども、今夜登して明日の間に合せねば、嚴う叶はぬ大事の用。無心ながら最そつとして、最一度寄て下さんせ。頼みまする」と詫れども、返事もせずに出にける。房は心も心ならず、日の暮までの約束が、初夜過ぎ四ツのかねてより、思ふたつばへあたりしと、門に出て北を見つ、濱まで歩み西東、足も冷て鐵釘を、胸に打ると幾瀬の思ひ。房「ヤア北から人が走つて来る。そりや徳様よ」と走り寄る。見れば以前の飛脚屋なり。「お房さまか、どれく御状は。舟が出ます」房「チ、道理く。此銀は京の妾が親里へ、明日の日中に渡さねば、いかふ詰らぬ銀なれども、今に先から來ぬはい

さしこみーさし
がね

格子祝一客引き
の爲の歩き

額たれうー額刺
らん

肩がつかへたー
肩揉る

の。定し今に來ふ程に、まそつとしてから來て下され」飛「いや最早來られませぬ。來てから今夜は出されませぬ」と、言捨てこそ歸りけれ。房は一人とほんとして、「今夜の首尾を違へては、一代京へ繋れて、連添ふ事も限りとは、根堀知ての上なれば、如才のあらふ筈もなし。皆おか様のさしこみと、思ふも地體此方の無理。身一ツ胸を据えたれば、寧そ悲しい事もなし」と、内へ歸れば主人の内儀「房は今まで門にか。此寒いに物好きな。惣じて此中浮々しやる。些と心をしめやよ」とありければ、房「されば餘り餘所が賑かさに、格子祝ひに出ました」と、言捨て二階へ上る體、氣懸りなれば目を放さず。折々心をつけたるが、房はそれとも白紙の、障子の月を明りにて、剃刀出し合せ砥に、かよらましかば斯とだに、ま一度顔見て死たいと、思へば引るゝ後髪、手も戰慄くゝとぞ顫ひける。主人見付て背後より、「房それは何しやる」はつと驚き振返り、房「ハア内儀様の何じややら、喫驚としました。あんまり好い月影に、額たれうと思ふて」と、紛らかせば打笑ひ、内「ヲ好い處へ來て仕合せや。幸ひ旦那殿髭そつてくれとある。些と其剃刀貸してたも」と、引たくり押包み、暫しは顔を打守り居たりしが、「ア、一昨日の煤掃に、たんと肩がつかへた。そろく揉でたもらぬか」房「あい」と後に廻しも、扱は氣色を見取られしと、悲しさ

それやーそれしや

無下なふ云々ー
無茶に妨ぐる

思ひばか云々ー
思ふやうにはか
ゆかぬ

身のひしー身の
異離

怖さ彌増して、更に別ちもなかりけり。有繫それやの女房とて、世間咄しに氣をゆるませ、内「是なふ房、何時ぞくと思ひしが、序でに和女に異見がある。我も始めは勤めの身、素人の言ふ事と一つに聞けば曲がない。心鎮めて聞てたも。曲輪や此處の奉公は、樂みなふては勤まらず。無下なふせくではなければども、それにさへ猶懸引あり。必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の密夫同然にて、思ひばかいかぬ物ぞとよ。徳兵衛様とも今は挨拶きつたとある。チ、くく仕合せく目出度い事。お辰様を離別させ、添ふて和女の本望ならず。最愛しい人の身のひし、一門中の憎しみ受け、和女を鬼よ蛇よといふ。又圍はれて世を忍び、後家同然に暮しても、これが何の手柄ぞや。若木の花は一盛り、老木の枯葉色失せて、變るは男の心ぞや。餘のお山衆と違ふて、十チの年から子飼にて、豆腐取て來い、八百屋へ走れ、駕籠呼でおじや、掃掃除、戸棚の鍵まで預けしは、小さいからの馴染だけ、我子の様に思はれて、好い客もがな出世させ、下女の一人も連させたふ、思ふは此方とばかりかは、皆親方は同じ事。譯もない事仕出して、慘い目見せてたもんなや。爲の好い事あるならば、今でも暇をくれといや。欲を離れた是證據、損といふて僅の事、不便な目を見やうかと、案じ過しがせらるよぞや。思ひも寄らぬ憂ひをか

人ごとと言はば云
云一語、噫をす
れば隆に風じ

とひもせぬ云々
一問ひもせぬ客
の催促

道じや云々一語
の歸る道なれば
「箱屋へ寄つて
くれと也

け、必ず泣せてたもんな」と、涙も聲もしめぐくと、残る方なき恩の程、房は顔を上もせず、只「あいぐ」としやくり泣き、延紙の幾重を絞りけり。客かあらぬか表にて、「能ふ入りました」といふ聲す。「誰様じや」と澄して聞けば、「いかふ冷えるが、兄貴の氣色變る事もないか」と云ふ。内「ハア、人ごと言はば延敷け。徳兵衛様さうな」と、聞くより胸もさはさはと、飛も下りたき心なり。時に、丁稚が門口より、「向ひの肥後屋から、房様ちやつと送らつしやれ。お客は堺の。早ふぐ」と呼ばれば、料理人不審を立て、「とひもせぬお客の斷り、合點が往かぬ。房様はお暇が入る、成らぬ」といふを房聞いて、「あれは何故に」と問ひければ、内「チ、さればいの。彼の宿で徳兵衛様に逢やつたゆゑ、それで遣るなと吩咐た」房「エ、内儀様の譯もない、それはあつて過た事。今は挨拶切れた上、徳様は此處になり、何んの氣遣ひ。堺の客は正月を頼まねばならぬ人。平に遣て下さんせ」と、いふも誠と思はねども、内「チ、それも左様。これなふ房を送ろぞや」と呼ばはれば、下にて料理人「そんなら道じや。駕籠へも烏渡寄てくれ」「心得太郎べの婆々様」と、喚いて使は歸りける。内「サア身仕舞して早ふ行きや」房「いや夜もいかふ更ます。ツイ此儘」と、連立ち二階を下りる間に、駕籠を庭にぞ昇寄せける。房「徳兵衛様遊んでお歸りなされませ」

際の商云々一節
季の商賣故まつ
かりせよ

能うぞく一能
く来たの意
夜と共に一夜
中
なんの中船云々
一中船をかけた
とヤラ

といへば、恹氣た顔付にて、「誰じや房か。際の商跡をつめや」と餘所くしう、口にはいひて魂は、一つ駕籠なる番鳥、飛立つばかりに見えにける。色を覺りて女房、「これは夜更て御大儀な。先つお上りなされませ。酷ふ冷える酒一つ。それ爛つきやや」とありければ、徳「ア、措やく最う歸る。此頃酒があたつて、今も今女共、生姜酒を飲させうと、手づから生姜研すやら、それが嫌さに漸々と、これへ逃て參つたに、又酒を飲めとや。やれ逃ん」と、出る處を女房飛下り、立塞り、「何んの無理に進ませせう。茶でも一ツ參りませ」徳「いやく、此頃は茶があたります。今も今或方で生姜茶をくれたを、漸々と逃延た。是非歸して」といふ處へ、兄の主人寢間より出、「ヤア徳兵衛能うぞく。夜が寝られぬに夜と共に咄さう。サア此處へ」と呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議も言はれず不返事に、もちくしてぞ上りける。兄「なんと中橋架たの。欄干渡すばかり。春は町中渡り初め。氣色も次第に快し。寒明たら本服せう。これといふが此夏の、西國の御利生。ヤ三十三所の風景一々語つて聞せん。サア碌に寛りと居や」と、果しも知れぬ長咄し。徳兵衛心もだくと、可哀や房を今まで待せ、又宿屋でも憧れん。早ふ立ちたさ氣は喘て、「いや申し、今宵は我們伊勢講、講中待て居らるべし。罷歸る」と立んとす。兄「先づ待ちや。

自身番一町役人の詰むる番所
あいたしこし
こは添詞

反らさぬ顔一病
氣痛つたと本氣
な顔
まぎら一胡魔化
し

内と外一内には房
兄等、外には房

今迄誰が待ものぞ。まそツと咄しや」と留められ、徳「いや、鎗屋町の隠居へ齋に参る約束、是非お返し」といひけれども、兄「はて齋は明日の事。平に」といふに詮方なく、徳「女共が懐妊、何時に産致さうも知れず。お戻しなされ下され」と、いへども兄は聞入れず。徳「遁れぬかたの自身番、見舞度ふ存すれども、是ではお返しなされまい。あ痛く。あいたしこく。冷える加減か俄に疝氣が起つた。歸つて養生いたしたい」兄「はて譯もない。夜氣にあたつて猶痛まふ。薬でも遣ふか」徳「いや、最う薬も通らぬ。駕籠に乗て歸りたし。あ痛あ痛」と呻けども、内儀推して外へとは出ずこそ。小座敷の炬燵に、火をたんと入れさせ、内「泊つて御座れ」と強ければ、徳「いや、今年この炬燵は、いかう人にあたります。今も今女共こが生姜炬燵を仕懸て、漸々詮言いたした」と、心は先へ脱売の、何をいふやら譯もなし。内「此處こになりとも寝せませ」と、蒲團打着せ表には、内儀手づから錠下し、内外の者めに目配せし、徐々側へ退く様子。徳「ム、ウ氣が付た」と反らさぬ顔「いや、寒いに往なうより、温あかにして泊つたが、先づ此方の徳兵衛」と、重き心を輕口に、蒲團被つて行く振も、涙くろめし三重まぎらなり。内と外とに引合の、心の駒の諸手綱、房が思ひの通ふかや。夢とはなしに現なや。顔をならべて見る様で、抱き付けば小夜蒲團、涙に濡

明けてものけ
大幣—大幣の引
手あまたの歌よ
りいふ、多人數
の手にかけたる
蒲團

山口屋—止まぬ
にかく

あるにこそ—例
の反語、ならぬ
の意

請—請人

れて冷々ひやひやと、髭かみじほどけて身に障さる。其夜の心地染々しみじみと、身に引纏ひきまとひ寢て見ても、一人轉ひざりころりはエ、埒うちがない。心の内はむしやくしや枕まくら、寧いつも明ても退のけよかし。袴はかまア、大幣たほねの此蒲團ここのひらた、小六も寢つろ、小夜も寢つらん。房も寢よふ、引手ひくて數多あまたに何處どこの誰奴たれめと寢くさつた。撲うちたい踏かみたい叩たたきたい。ゑよ〜〜踏ふむな蒲團ひらたに科まがもない。今は踏ふでも叩たたいても、房あはに逢あれぬ逢あせぬか」と、炬燵こたつにとんと腰こしも脱ぬけ、譯わけも涙なみだに我身わがみながら、男おとこの様ようにもなかりけり。戀こひの寢端ねはなの屋根やね續つき、何時いつか思おもひは山口屋やまぐちの、物干傳ものほしづたひ忍しのび來きる。餘所よその戀こひかと羨うらやしく、見れば兩戸ふたどの戸袋とぶくろを、密そつと踏ふへる足元あしもとも、顫ふるひ〜の目めも眩くらて、房ふヤア此處こゝにかいの「房ふかこれは如何いかぞ」とばかりにて、炬燵こたつを中ちゆうに手てを取とり、只泣ただなくより外ほかの事ことぞなき。涙なみだの中ちゆうにも男おとこの顔かほ、じろ〜と見て、房ふア、いとほしや、氣きを揉もまんすゆゑにやら、顔かほにたんと瘦やせが來きた。其苦くるは誰たれがさするぞい。皆妾わしゆゑと、それは〜忘わするゝ事こともあるにこそ。去さりながら、最もう苦くるにして下くだんすな。斯かういへば如何いかやら拗すねていふに似たれども、微塵みじんも左ひだり様ようした心こゝろもなし。妾わしが京きやうの父様ちちさま、よしない者の請うけに立ち、明日あす限げんりに銀立かねたてねば、妾わしを遣やるとの判かきじやけな。妾わしは此處こゝへ身みを賣うて、先まづから連つれに來きた時は、二重賣にぢううり二重判にぢうはん、牢舍らうしやは鏡かみにかけた事こと。成ならぬ事ことをくどくと、思おもふは愚痴ぐちの至いたりなり。先立死さきだちなんと剃刀かみそりを、

萬事至極—至極
道理に叶ひたり

理をもつ女—
辰を指す
張良樊噲—漢高
祖の功臣

手に取りは取たれども、内儀様に見付られ、得死にもせず居る間に、此方様の聲はする、向ひ側より呼に來る。嬉しや先で何事も談合せんと、今迄待ぼうけになつたれども、一目逢へばこれ本望。末頼みない契りなれば、これ限りくと逢ふ度毎の觀念、今更溜ていふ事なし。貞女を立るお辰様の蔑みも恥しい。中好ふして下さんせ。互に生れかはつたら、本妻定めぬ其先に、早ふ女夫になりませう。言置く事は是ばかり。サアく戻つて下さんせ」と、良人に幹としがみ付き、絶入るばかりに泣居たり。鶴ヲ、聞かねど萬事至極した。去ながら、其詞嬉しい様で恨みあり。本妻あるは知れた事、同じ口で諸共に、死んでくれといふてたも。京の便を大事に思ひ、騙瞞同然の才覺にて、銀四百日借出し、一時ばかりは懐にあつたれども、兎角二人に死脈が打つ。何處も彼處も一時に、汐のさいて來る如く、ばらくと首尾わるく、元來理をもつ女共、理屈を詰て恨み泣き、いかな張良樊噲、でも、道理に對ふ矢先はない。銀も渡す、其場にて見すく嘘の空誓文。とても廻れぬ此罰。佛神を待たずとも、此方から當つて埒明けん、道から胸は居つたり。死直しは二度ならぬ。啣ち顔は曲もなし。手に手を取て莞爾と、死ね、死なうといふても」と、炬燵に顔を打投て、世にあぢきなき涙の體。身なふ左様思ふてが定かいの「徳」思

空耳—聞き違へ

ふが不思議か女夫じやもの」房「眞に左様じや忝い」徳「嬉しふ御坐る」と抱き合ひ、聲を立てずの絞泣き、炭火も消えて凍るらん。奥へ斯とや聞えけん、兄の聲にて、「なんと徳兵衛、痛みは好いか」と、ごつく急て来る音す。「やれ隠れよ」と狼狽へて、房を炬燵に押入れ、蒲團被せて徳兵衛は、上に凭れ覆になり、顔もきよろくなりけり。程なく主人立出で、「物言ふ聲の聞えたは、誰であつた」と不審顔。徳「いやそれは私囁語がな申したか。但しお前が病耄けて空耳でがな御座りましよ。歸つてお寝みなされ」といへば、足「イヤいかふ夜が寢憎い。咄さいた西國の物語して聞せう」と、炬燵にあたるうたてさよ。足「ヤア炬燵の火が薄い。これ女房ども、火を赫とおこいて、火斗に二三杯持ておじや」と呼はれば、徳兵衛恟つとして、「申しく火の烈いはお毒。御無用に遊ばせ」足「いやく裾が冷える。膝節の焦る程なが此方は好い」といひければ、徳「平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火が付たらば、御身體の妨げ」と、いへども兄は懲めと思ひ、意地悪ふ、「火を早ふ持ておじや」とぞせがみける。徳「ア、申し、お前は病氣で引籠つて世間を御存じ御座らぬ。此冬から何方も、火の強い炬燵廢りもの。北脇邊の好い衆は、大概炬燵に水を入れるけに御座る。重ね井筒ともいはるゝ身が氣の通らぬ。炬燵に火を入れなるとは、さりとてはお

氣の通らぬ—氣がきかぬ

お笑止—お氣の
毒

懲しめの—此下
に爲にしたる迄
の句を入れて見
るべし

咸陽宮—始皇帝
の宮殿、項羽之
を焼けり

のめく—おめ
おめ

笑止な。あれおか様、火は入らぬと仰やるよ」と身をもがく。其間に火斗は、焦るよ紅葉葉を盛たる如き池田炭、遠慮も内儀が炬燵にうつし、「サア温らんせ」と言捨て、臺處にぞ出らるよ。側で見るさへ徳兵衛、身も焦け渡る心地にて、「兄者人其火で熱ふは御座らぬか。寧その事に火炙にならしやれぬか。此處まで火氣が來ます。些と埋けて消ませう」と、寄らんとすれば、「其儘措や」と、止められては炬燵より、胸を焦すは徳兵衛。房は涙の埋火に、焼付らるよ身の苦しき、蒲團の蔭より手を出し、裾に取付き堪えんとするにたえがたき、地獄もかくやと不使なり。主人も一旦懲しめの、さのみは哀と思ふにや、兄ア、温まつた最う歸る。和郎も寝みや」と立歸る。徳兵衛兄ながら恨しくや思ひけん、「とてもものに眞黒に焦るまで、温つてお歸りなされかし」と、いへども有繫一言も、岩木をわけぬ人心、奥の一間に入にけり。徳兵衛は小腹立ち、櫓も蒲團も一ツに擱で取て擲れば、咸陽宮の烟の中に、顔も手足も紅の、房は目ばかりじろくと、物をも言はず片息の、性根も亂るとばかりなり。漸々に抱上げ、袂に煽ぎ身を冷し、花活の水幸ひと、顔に灑ぎ口しめし、少し心も爽けり。徳サア兄貴までが知られたり。何面目にのめくと、人に頬をまぶられん。いざ此處で尋常に」と、脇指取らんとせし處を、房左様さへ覺悟極

今身より云々
日蓮宗にて常に
唱ふる語

嶺の峯一獨尊の
法華を説き給ひ
し際嶺山

れば、嬉うれしいく。去ながら、此處で中々思ふ様やうによもなるまい。屋根傳つたひに裏へ脱ぬけ、樽屋町の門へ下り、宗門しゅうもんなれば日進にっしん様の御門で死なせて下さんせ」編もヲ、尤もく、有難ありがたい心ざし。サアおじや」と立けるが、「サア和女わにょは法華ほっけ己たれは淨土じやうど、願ねがふ所が別なれば、先の往端いはいも覺束たばつかなし。宗旨をかえて一所に行かん。今題いまだい目を授さづけてたも。疾さくく」と手を合すれば、房ふかは不覺ふかくの涙にくれ、「妾わしに淨土じやうどになれとも言はず、法華ほっけになつて下さんする、さても嬉うれしい心やな。勿體もつたいない事なれど、今まで毎日千遍まいにちせんべん宛づつ、五年唱へた題目の、功德とくごで赦ゆるしたび給へ」と、互あひひに合掌がっしやう心を鎮しづめ、今身こんしんより佛身ぶつしんにいたるまで、能たく保たもち奉る南無妙法蓮華經なんぶみょうほつれんげきやう。今身こんしんより佛身ぶつしんに至るまで、添そせ給へ添そせて給たべ。南無妙法の力を頼たのみに、慥しつかと負たうて上のぼる二階にかいや、三重屋根さんじゆうこんの棟むね、鷲じゆの峯みねぞと一筋いちすぢに、這はふつ辿たどりつ傳つたひ行く、道みちは三途さんづの瓦葺かはらぶき、霜しもの劔つるぎの山やま牙こえて、此處こゝに地獄じごくの鬼瓦おにがわ、弓手ゆんでも馬手めてもおそろしく、逝のれ遁にれて行末ゆきすえは、今ぞ冥途めいじゆの門出かしいでと、これを限かぎりの立酒たちざけや、樽屋町づるやまちにぞ三重迷さんじゆうひ行く。

下之卷

道行血汐みちゆきしほのおぼろぞめ

筒井筒一此頃松の落葉卷六にあり
晨の雲云々之若殿卷五にあり

色駕籠一遊女の乗る駕籠

濱側一道頓堀の岸邊

七つ之芝居一次座の片岡仁左衛門座、山本飛騨掾の人形芝居、岩井半四郎座等

築川一名は重郎兵衛、塚の名は次郎左衛門

葛蒲草一芳名あやめの練語
嵐一名は三右衛門

懸幕の云々八百屋も七の祭文の句、松の落葉にあり

筒井筒一、井筒の水は濁らねど、今は涙に搔濁す、月も袂に搔曇る。晨の雲夕の霜、仇しが浦の空穂船、身を無きものと知りながら、愛し憎しの戯れも、少時此岸彼岸の、假の現の假橋や、藻に埋るゝ牡蠣船の、苦の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日まで待たぬ我命、我と失ひ二親の、育てし御恩は如何せん、歩みもやらす泣居たり。送り迎ひの色駕籠も、少時途絶えは何國にも、馴染くの寢入花、我身は今宵散果る、名残盡せぬ濱側の、此處は竹田か夜は何時ぞ。五ツ六ツ四ツ千日寺の、鐘も八ツか七つの芝居。二人が噂世話狂言の、脚色の種となるならば、我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は、臺詞に泣てくれよかし。包む袂の飛驒之丞、二個遣ひの用品にも、斯る姿振寫すとも、此思ひをばよも知らじ。去歲のお島の心中の、其井筒屋に我が今、重ね井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎、憂ひ臺詞の葛蒲草、露のおとしも御身と我が、積る涙の雫かや。西に嵐の吹霽れて、空は冴ても我々は、戀慕の闇に暗がりに、よしなき事を仕出して、東の果に名を流す。それに劣らぬ歎きごと、最と思ひに吳竹の、節を習ひし淨瑠璃も、他所の事よと慰みしが、今身の上に降る霜の、一足づつに消失せて、死に行く身の味氣なや。あれ見返れば人聲の、我を尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝ鰐口や。頼みを

五逆の提婆―提婆連多の五逆罪人も天王如來とかなると也
龍女も成佛―八才の龍女成佛せし華嚴經にあり

身を捨つる云々―子を棄つる數はあれど身を捨つる數なしといふ語を含めてい

かけし御經の、此三界の衆生は、皆是れ我子と聞く時は、親諸共に至るなりけり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如來。龍女も成佛する時は、煩惱菩提となるぞ頼母し。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を、只此七字に納りし、大曼陀羅や曼陀羅雪、雨にも風にも詣で来て、朝は現世夕は後世、此世彼世の二面、今宵一ツに桐の葉の、影は浮世の塵芥、共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所、身を捨つる數となりにけり。涙に迷ふ其中にも、男は有繫男にて、「なふ世間を聞けば、女先立ち、男は跡に死損ひ、見苦しき沙汰に逢ふ、無念の上の死恥ぞや。先づ我から」と脇指を、抜んとすれば抱き付き、男なふ待つて下さんせ。今死ぬる身といひながら、大事の良人が目の前で、朱に染つた體を見れば、氣も狼狽へ目も昏て、如何しか死なれうぞ。なから死して恥さらし、此方様の死骸の帯解き、紐解き打返やし、詮議のあるをじろくと、そもや見て居られうか。妾から先に」と手を持添へ、我身に差當忍び泣き、男は力涙に迷ひ、又物持つ手も弱々と、女の膝に伏轉び、覆ひ重なり泣居たり。石の鳥居の彼方より、女の泣き聲、子の泣き聲。鶴、南無三寶我家の提灯、女房、子共、家來ども、見付られては情なし。小橋の方で死ぬまいかと、立上らんとせ

千賀の云々一節の近と後の焦すの縁をとつていひし迄なり

一興一此は純しと也

し處へ、ハヤ道傍まで尋ね来て、間は僅か半町に、足るや足らずも因果の隔、百里も同じ如くにて、近き甲斐なき千賀の鹽竈身を焦すこそ哀れなれ。妻のお辰は背よりの、涙と霜に袖凍り、物言ふ力もなき中に、辰「あれく夜明も近付か、鴉がいかう啼くはいの。外の欠落走者と違ふて、明日尋ねふとはいはれぬ。死に出た心中なれば、疾に命は最う無
い人。浅間しや悲しやな。女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、嗚や最期の悔言。お房の恨みも思ひやる、思へば妾があるゆゑに、人二人殺すよな。位牌に對ふて言譯ない。冥途の旅を連立たん」と、下人が指いたる脇差に、取付く處をもぎ放し、下人「これは一興。此子は最愛ふ御座らぬか」と、止むれば小市郎、「母様死んで下さるな」と、嘆く聲さへ身に沁て、野邊の霜風小夜嵐。丁稚の三太もうろく涙、「心中といふものは、いかふ寒いものじや」とて、共に袖をぞ絞りける。徳兵衛囁て、「月は傾く東は白む。躊躇ふて今の中に、見付られんは浅間しよ。いざ何事も、宵よりいふた通りぞや」房「應」と首肯くばかりにて、涙に物をいはせつよ、夫の膝をしつかと押へ、仰向き待たる口の内、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華を、一つ蓮華にと、ぐつと突貫く一刀、わつと叫びし一聲の、あはれ墓なき最期なり。辰「今のは何處じや。サア知れた」其處か「此處か」「いやく

水の哀—水の泡
にかく
御法の水—池水
を妙法の水とし
て供養忘らぬ意

南に聞えた」と、こたまひび 砦の響きは氣も付す、皆生玉へと走りける。みつげ 見付られじと徳兵衛、はたけ 畠の中
を西東、にしひがし 此處に屈み彼處に忍び、「今は嬉し、一所に」と、房が死骸を尋ね寄る、道も心も埋
れ井戸、ふみほづ 踏外してかつばと落ち、水の哀れや汲上て、かき 重ね井筒の心中と、みのり 御法の水をぞ
湛へける。